

# トルコ共和国における国民文化としての 舞踊「ハルクオユンラル」の創造

お茶の水女子大学大学院 松本奈穂子

本研究では「伝統の創造」、「文化の捉え直し」という視点にたつて、トルコ共和国における国民舞踊の創出過程を、カフカス舞踊を例として検討することを目的とする。異文化交流あるいは異民族間の軋轢の解決が急がれる今日、多民族・多文化が交錯するトルコ共和国の舞踊を整理し、「国家」という枠組みにおける再構築の過程を明らかにすることは、課題解決へむけての大きな示唆を与えてくれると考えられよう。

本研究のための調査は、文献調査、面接調査、参与観察等の方法をとった。各項目とも、1996年6月から1997年9月にかけて、イスタンブールの国立トルコ音楽院留学時、および1998年夏の現地調査が主体となっている。

トルコ共和国における民族舞踊の一般的な名称は、トルコ語では「テュルクハルクオユンラル」、直訳するとトルコ民衆舞踊となる。本論では、公定化された「国民文化」としてのハルクオユンラルを「国民舞踊」とし、国民舞踊化されず、公定の規定にとらわれないハルクオユンラルは、そのまま民衆舞踊として区別した。

トルコ共和国は多数の少数民族を内包する多民族国家であり、そのアイデンティティの所在は多様である。国民意識確立のために、その創出が急がれた国民文化の中には国民舞踊も含まれ、1950年代以前は国家主導型、50年代以降は民間組織における国民舞踊活動とともに、現在踊られている国民舞踊の形態が確立されていった。国内の多様な舞踊文化は果別に区切られ、図1のように民衆舞踊の舞台化、国民舞踊の形成が行われた。

一方、民間国民舞踊活動組織の中には、民族別分類のもと活動を行う組織も存在する。事例として取り上げたカフカス舞踊は、本来民族別分類に属する舞踊活動が、概念として地域別分類に組み込まれ、国民舞踊として公定化された舞踊例の一つである。本研究では、カフカス本国において旧ソ連体制下、国民舞踊として高度に舞台化された舞踊を「舞台化カフカス舞踊」、トルコ共和国における国民舞踊として1950年代以前に公定化されたカフカス舞踊を「カルス・カフカス舞踊」、一方50年代以降民間の国民舞踊活動の中から新たに誕生した、概念としての「カルス・カフカス舞踊」と舞踊動作としての「舞台化カフカス舞踊」の融合体を単に「カフカス舞踊」とした。また、民衆の社会生活レベルにおいて、国民舞踊としてでなく、自らのアイデンティティを表象するもの

として踊られる舞踊は「民衆カフカス舞踊」として区別した。

トルコ共和国におけるカフカスのイメージはカルス県に集約され、「カルス・カフカス舞踊」という名称で、国民舞踊に組み込まれていった。一方カフカス系トルコ共和国国民は、カルス県のみならず国内各地に散住している。50年代以降の民間国民舞踊組織の誕生に伴い、各民族ごとに文化協会が設立され、舞台化カフカス舞踊活動が推進された。民衆カフカス舞踊ではなく舞台化カフカス舞踊のみが協会レベルで踊られる背景には、舞台化カフカス舞踊を国民舞踊の素材として全トルコ共和国国民に提示するという、国民舞踊形成への参入の姿勢がうかがえる。彼らの活動は、概念における国民舞踊としての「カルス・カフカス舞踊」という公定の認識と、舞踊動作としての「舞台化カフカス舞踊」の融合という形で集約される。

本研究から浮上してきた「国民舞踊」の成立要因例としては「民俗舞踊の一形式が国家によって国民文化の鑄型にはめなおされる作業」「エスニシティに根ざした舞踊活動の集約」「舞踊そのものの魅力に起因する大衆の支持」などが挙げられよう。これらをカフカス舞踊にあてはめてみると図2のようになる。

本研究を起点として、今後の展望としては、舞台化カフカス舞踊の最も重要なレパートリーであるレズギンカの形成過程をたどるとともに、舞踊動作分析の観点からも、現代の国民舞踊創造の過程におけるダイナミズムを捉えたいと考える。

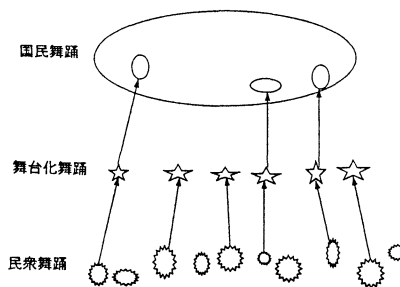


図1 国民舞踊創出図

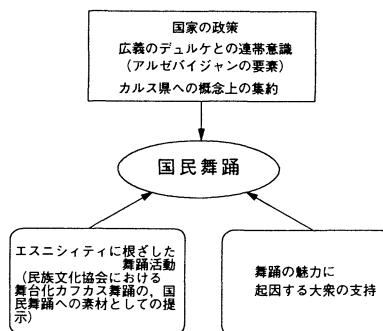


図2 国民舞踊の成立要因例（カフカス舞踊）